

音声に関する評価研究の概観と今後の展望

小池 圭美

要 旨

本稿では、まずこれまでの評価研究で明らかにされていることを示し、よりの確にまた具体的に音声教育に活かしていくための今後の課題を述べたい。また、コミュニケーション中心であり、社会的で感情的な要素を含む新しい音声教育のために、今後必要とされる評価研究を探ることを目的とする。

そのために本稿では、①「評価基準」②「評価者の属性による差」③「発話者のレベル」④「どのような場面設定がなされているか」⑤「共生言語としての日本語を目指した評価研究」という5つの視点から先行研究を概観した。それを踏まえると、今後は、学習者の学習目的に合わせ、場면을重視した音声教育が必要であり、そのための評価研究が必要であると考えられる。

【キーワード】音声教育、 評価研究、 場面、 共生言語

1. はじめに

日本語教育学会(1991)は、東京都内の5つの主要な日本語教育機関に在籍する学習者を対象にした質問紙調査で、学習者が4技能中、「話す」技能を最も重視したことを明らかにしている。音声教育は、4技能中、「話す」技能と「聞く」技能に関係するものである。さらに、今後学習したいことの回答として、「自然な発音・イントネーションで話す」は第2位であった。つまり、学習者の音声教育に対する要求は実に高いと言えるだろう。

これまで、単音に限らず韻律的特徴に関しても様々な結果が報告されている。水谷他編(1992)文部省科学研究費重点領域研究『日本語音声』D1班では、日本語音声の韻律的特徴と日本語学習者の母語の韻律的特徴との対照研究、また学習者の母語が日本語韻律に及ぼす干渉が報告された。しかし、小河原(2001a: 66)は、「音声教育を体系的・計画的・継続的に行っていくために、実際にそれら音声的要素の『何を』『いつ』『どの順序で』『どの程度』『どのように』教えるべきかという教育現場に直接応用可能な具体的提案や実践的研究はまだ十分であるとは言えない」ことを指摘している。つまり、日本語の単音や韻律的特徴が明らかにされ、様々な言語を母語とする学習者の問題点などが解明されつつある

ものの、それをどのように日本語教育に活かしていくべきであるのかは明らかにされていないと言えよう。

次に、オーディオリングメソッドからコミュニケーションアプローチへの移行に際し、1960年代後半の英語教育では一時音声教育から離れる傾向にあった(Anderson 1989)。しかし母語話者に近い発音を目的としていたオーディオリングメソッドの時とは違う、新しい音声教育へのアプローチが提案されており(Anderson 1989; Morley 1988)、そこではコミュニケーションを重視した音声教育の重要性が言われている。つまり、話し手の意図を聞き手が理解するのに必要な正確さを求めていくことが必要だと述べられている。また、Stevick(1978)は、音声教育は感情的で社会的な要素を含むと指摘している。Stevickの論文では、例えば下手に発音すると、社会的な面でもアカデミックな面でも人より劣る学生であると見なされることが言われている。こういったことは、日本で日本語を話す非母語話者においても、当然起こりうることであろう。日本語教育においても、単音中心である、または誰もが母語話者の発音に近くなることのみを目標にしてきた音声教育から、新しい音声教育へ移行する必要性がある。

それでは、新しい音声教育とはどのような教育

だろうか。筆者は、Anderson(1989)、Morley(1988)の言うコミュニケーションを重視した音声教育、また Stevick(1978)の言う感情的で社会的な要素を含む音声教育においては、話し手の感情や意図が正確に伝わることを目指さなければならないと考える。そのためには、常に場面を考慮していくことが必要であろう。場面がないところには、話し手に感情も意図もないのである。また、これまでの音声教育では、誰もが母語話者の発音に近くなることを目指してきた。しかし非母語話者の発音に対するニーズは、それぞれ違うことが考えられる。母語話者も、全ての非母語話者に母語話者レベルの発音を求めるべきではない。非母語話者の目的に合わせた目標設定を行う必要がある。

本稿では、まず評価研究で明らかにされていることを示し、よりの確にまた具体的に教育現場に活かしていくための今後の課題を述べたい。また、新しい音声教育のために今後必要とされる評価研究を探ることを目的とする。なお、ここで言う評価研究の範囲は、印象や感想のレベルを含んだものとする(小林 2000)。

2. 評価基準

本章では、大きく「日本語らしさ」に焦点をあてた研究と「印象」に焦点をあてた研究に分けて概観する。なお、「日本語らしさ」とは、評価者が全体として母語話者の発音に近いかどうかを判定するもの、「印象」とは、評価者がその発音から受けるイメージを判定したものを示す。それぞれの観点の評価にはどのような音声項目が関わっているのか、またそれを受けて、音声指導を行う場合にはどの音声項目を重視していけばよいのかを考察し、より具体的に教育現場に活かしていくための今後の課題を提示する。

2.1 「日本語らしさ」に焦点をあてた研究

筆者の属する日本語学校では、初級学習者のみならず、上級の学習者からも「発音を直してほしい」「日本人と同じような発音で話したい」という声が聞かれる。このことから、学習者が日本人らしい自然なイントネーションを身につけたいと考えていること、またその需要は上級になっても続くものである可能性がうかがえる。

そこでまずは、「流暢さ」や「自然さ」といった、いわゆる「日本語らしさ」に注目していると思われる

の評価基準を調べた先行研究をとりあげる。以下の概観は発音のみを対象としたものではないが、まず「日本語らしい」という評価に発音がどのように影響を与えているかを見たい。

渡部(2001)は、母語話者は「流暢さ」の概念をどのように認識しているのかを調べるために、非母語話者のロールプレイによる発話に対する調査を行っている。そして、「流暢である」とされた非母語話者1名と、「流暢でない」とされた非母語話者1名を対象として、その「流暢さ」に関わる要素を調べた。その結果、「流暢でない」という認識に関しては、「間の取り方が適切である」「全体的な流れが自然である」といった「時間的な要素」が注目されていることを指摘した。また、「流暢である」という認識に関しては、「アクセントが自然である」「イントネーションが自然である」などの「発音」が注目されている可能性が高いことを報告している。この結果によると、「流暢でない」と「流暢である」は反対語であるにも関わらず、異なる判定要素を持っていることになる。すなわち、渡部自身が指摘しているように、母語話者が個々の非母語話者のレベルを考慮してその判定要素を変えている可能性はある。ただし、前述のとおり「流暢である」とされた非母語話者1名と、「流暢でない」とされた非母語話者1名のみを対象にした結果であるので、その非母語話者個人の発話の特性が原因である可能性もある。

井内(1998)は、テレビで放送された11名の発話(母語話者1名を含む)が、日本語として「自然」であるか「不自然」であるかを、母語話者に5段階で評価させ、その理由を記述してもらうという調査を行った。その結果、不自然に思った理由として挙げられていたコメントには、アクセントやイントネーション等の発音に関するものが多かったことを指摘している。

しかし、以上の二つの先行研究は、「場面」についての考察がなされていない。まず、渡部(2001)は非母語話者のタスクに対する評価を行ったものであるが、具体的にどのようなタスクであるのかが明記されていない。注目される要素は、タスクの種類によって変わることが考えられるため、タスクの内容を考慮した上での考察が必要だと思われる。

井内(1998)で対象とされた発話は、弁論大会出場者のものを中心としていた。弁論大会とは、それ自体が評価を受けることを前提としているものであり、

特殊な場面である。日常生活やビジネス場面などを対象とした研究も必要であると感ずる。

また渡部(2001)、井内(1998)はいずれも画像はなく、音声のみで評価させたものであるため、ジェスチャーなどの非言語的要素は考慮されていない。このように今後の課題は多く残り、一般化はできないが、「日本語らしさ」には「発音」が大きく関わっている可能性がうかがえる。全体評価の中で、発音がどのような位置を占めるのかを明らかにしていくことで、発音教育の重要性を教師が認識することにつながっていくだろう。

それでは、さらに「発音」の中で何が「日本語らしさ」に大きく関わっているのかを調べたものを挙げる。

佐藤(1995)は、音の「高さ」「長さ」「強さ」の3つの韻律的特徴のうち、どの要素が「日本語として自然であるか」という評価に一番深く関わっているかを調べた。音の「高さ」とは、アクセントやイントネーションの下降、または上昇の幅を示す。音の「長さ」とは、個々の音素の長さを示す。音の「強さ」とは、それぞれの単音の強さを示す。非母語話者と日本語母語話者の音の「高さ」「長さ」「強さ」を入れ換えた合成音声と、オリジナル音声を母語話者と韓国語母語話者に評価させた。その結果、母語話者が評価を行う場合には、音の「長さ」や「強さ」よりも、「高さ」がその評価に与える影響力が大きいことを明らかにした。また、単音と韻律を比較すると、韻律のほうが影響力が大きいことも実証している。一方、韓国語母語話者はオリジナル音声と合成音声と同じではないことは判断できるが、合成音声日本語として自然になったか不自然になったかの評価基準はあいまいであることがわかった。

関(1989)は、韓国語母語話者の日本語音声の「不自然さ」の原因を調べるために、韓国語母語話者の朗読を日本語母語話者に評価させるという実験を行った。その結果、韓国語母語話者の全体的な不自然さは、イントネーションやリズムとかなり高い相関を示していることがわかり、中でもイントネーションとの相関が高かった。単音は、全体の不自然さと中程度の相関しかなかった。このことから関(1989: 186)は、「韓国語母語話者の日本語の不自然さの原因は日本語の韻律的特徴にあり、単音発音は全体の不自然さに影響していないことが確認された」と結論づけている。

以上の佐藤(1995)、関(1989)により、日本語として自然であるかどうかという評価には、単音より韻律のほうが深く関わっていると云えよう。

韻律の中では、崔(2003)が、日本語らしいアクセントについて調査を行っている。崔は、まずアクセント型を統一した文を作成した。アクセント型を統一した文とは、例えば「テレビとカメラを かえしてください」というように、全て頭高型に統一した文のことであり、他にも平板型・中高型・尾高型で作成している。その後、各句内で1拍ずつアクセント核を移動させた合成音声を作成した。それを日本語母語話者(東京方言話者)と、韓国語母語話者(ソウル方言話者、釜山方言話者)に聞かせ、「とても不自然である」から「とても自然である」までの5段階評価をさせた。その結果、韓国語母語話者は、それぞれの方言に似ている音を日本語としても「自然」とであると評価したことがわかった。つまり、指導を受けなければ、母語と違う「高さ」変化には注意が向けられないことが予想されると結論づけている。

崔の研究は、学習者である韓国語母語話者自身に評価をさせ、彼らが指導なくしてはアクセントの習得が困難である要因をはっきりさせたという点で、非常に意義がある。今後も、他の母語話者を対象としたり、アクセント以外の音声項目を対象とするなどして、引き続き非母語話者に評価を行わせていくべきであろう。

ここまで、日本語として自然であるという評価に、単音より韻律のほうが深く関わっていると述べてきたが、単音指導をまったく無視してよいというわけではない。例えば、筆者の経験であるが、ベトナム語母語話者は、上級になっても単音に大きく問題が残ることがうかがえる。単音に対する評価を調べた研究は数少ない。

東間(1991)では、非母語話者の単音に対する評価を行っている。この論文では、全体評価、不快感、自然度、理解度、容認度の観点から5段階評価を行い、それらの総合点から分析している。それぞれの観点の評価値は示されていないため、「自然度」という評価のみに何が関わっているのかを言うことはできないが、全体として東間(1991: 116)は、「評価者は音素の混同によって語の意味が不明となったり、誤解の原因となるような発音についてはきわめて非寛容である」と結論づけている。

今後も、様々な母語の非母語話者を対象とし、どの単音が誤解の原因となるのかを具体的に示していくべきであろう。また、「自然度」「不快感」などのそれぞれの評価には、どのような単音が深く関わっているのかを明らかにしていくべきである。

2.2 母語話者の「印象」に焦点をあてた研究

次に、「日本語らしさ」を評価基準としたものではなく、母語話者が受ける発話の「印象」を調査したものを取り上げる。話し手が発話した際の感情は、聞き手に正確に伝わらなくてはならない。まず、どのような発音を母語話者は丁寧であると感じるのだろうか。

荻野・洪(1992)では、「音声自体が持つ丁寧さ」を明らかにするための調査や実験を行っている。まず、母語話者にアンケート調査を行った結果、日本人は丁寧に話すときはゆっくり話し、またこのようなゆっくりした発話を丁寧だと判断していることがわかった。次に、話し手が、非常に丁寧な気持ちを込めて発話したものと、丁寧な気持ちをあまり込めないで普通に発話したものを母語話者に聞かせ、どちらが丁寧に聞こえたかを判断させる聴取実験を行った。そして、そこで丁寧に聞こえると判断された発話の音響的特徴を調べた。その結果、丁寧だとされた発話は、丁寧でない発話より長く発話される傾向にあることがわかった。つまり、「ゆっくりした速度」で話された発話を丁寧だと評価したことになり、アンケートの結果と一致する。

全(2001a)は、待遇表現とイントネーションとの相関性を調べるために、日本語の映画を分析している。そして、「丁寧な言語行動に見られるイントネーションの平均ピッチは、普段のイントネーションより高めになる」ことを報告している。また、全(2001b)は、お礼を言うなどの場面において、「敬意を抱いて」という条件下と、「敬意を抱かずに」という条件下で、母語話者に発話させるという実験を行った。その結果、やはり丁寧になるにつれ、イントネーションが高めになる傾向があることがわかった。全の研究は、発話を聞いて評価を行ったものではない。しかし、丁寧な発話においてイントネーションが高めになると言うことは、聞いて評価する場合にも、音の「高さ」が影響する可能性が考えられるだろう。

小池(2000)では、依頼という場面において、「～していただけませんか」の「か」のイントネーション

が上昇であるか非上昇であるかで印象が変わるかという実験を、母語話者を対象に行っている。その結果、「か」のイントネーションが非上昇であるよりも上昇であるほうが、丁寧であると感じられることがわかった。

全の実験は全体のイントネーションであり、小池は文末イントネーションのみであるが、「丁寧な発話」には音の「高さ」が関係していると言えるだろう。

以上の荻野・洪、全、小池の研究により、「丁寧な発話」には「ゆっくりした速度」と音の「高さ」が関係していることが示唆された。しかし、全(2001a)では、音の「高さ」が非常に高い場合には、話し手の聞き手に対する下心があるように思われるとの指摘もある。今後は、どのような発話のどの部分の、どの程度の音の「高さ」が丁寧であると感じられるのかを検討しなければならない。また、音の「高さ」と「ゆっくりした速度」以外にも、例えば語気の「強さ」や間の取り方、さらには文末の音の「長さ」なども「丁寧な発話」に関係してくると思われる。たとえば、小池(2000)では「～していただけませんか」の「か」のイントネーションが上昇であるほうが丁寧であると感じられることが報告されたが、「か」のイントネーションが上昇であっても、もし強く短く発音したなら、丁寧であるとは感じられないのではないだろうか。

次に、母語話者が受ける印象として、「好感度」を調べたものを紹介する。

2.1 で取り上げた井内(1998)は、母語話者 1 名を含む 11 名による、テレビスピーチなどの発話に対する母語話者の評価を調査した結果、「好感度」に関しては、「わかりやすさ」を判断基準に挙げていたものが多かったという。「好感度」と「わかりやすさ」が密接な関係にあるのであれば、今後はどのような発話がわかりやすいと評価されるのかを詳しく調査していく必要があるだろう。

「丁寧さ」や「好感度」の高さは、円滑なコミュニケーションを行っていく上で大切である。もし本人にそのつもりはないのに、聞き手に「丁寧でない」「好感が持てない」などの印象を持たれたとしたら、それは看過できない問題ではないだろうか。非母語話者の感情や意図が聞き手に正確に伝わるのが、一番重要なことであると筆者は考える。今後も、様々な場面における発話とその印象を調べてい

くことで、学習者に適切な助言を与えていくことができるだろう。例えば、「丁寧さ」や「好感度」のみならず、「怒り」や「悲しみ」などにはどのような特徴があるのか。また丁寧な発話と言っても「依頼」「謝罪」「断り」など様々な場面が考えられるが、それぞれの違いはどこにあるのかを評価研究によって明らかにしていくべきであろう。

2.3 「日本語らしさ」と「印象」研究のまとめ

上述のように、佐藤(1995)により、音の「長さ」や「強さ」よりも、「高さ」が「日本語として自然である」という評価に与える影響力が大きいことが明らかにされている。さらに、全(2001a) 全(2001b) 小池(2000)により、「丁寧さ」と音の「高さ」が関係していると言われている。「日本語らしさ」においても「丁寧さ」などの印象面においても音の「高さ」が影響しているということは、音の「高さ」が評価に与える影響は大きいことが考えられるが、次に紹介する石崎(2000)によっても、それは裏付けられる。

石崎(2000)は、日本語教育経験のない女子大生に、インタビュー場面のビデオを見せ、「語彙が豊富」「語の誤りが多い」「文法の誤りが多い」「発音がいい」「流暢」「わかりやすい」「ことばで癩に障るところがあった」の7項目について評価させている。さらに発話テキストを分析した結果、句を単位とした音の「高さ」は全体評価の「わかりやすさ」「癩に障る」の両方で相関が有意になっていることがわかった。このことから石崎(2000: 31)は、「音声の評価は音の高低の影響を強く受けている」と結論づけている。

以上より、「日本語らしさ」を重視する場合にも、「印象」を重視する場合にも、音声指導を行う場合には、特にアクセントやイントネーションの「高さ」に重点を置いていくことが必要であると思われる。しかし、前述のとおり、今後はどの部分にどの程度の音の「高さ」が必要であるのか、また音の「高さ」以外に関係するもの、例えば語気の「強さ」や音の「長さ」なども明らかにしていくことで、より具体的な指導に結びつくと思われる。

一方で、「日本語らしさ」と「印象」は、別の問題である。井内は、日本語として正確であれば好まれるというものではないことを指摘している。また、石崎(2000)は、言語能力に対する評価と、癩に障るなどの心情に関する評価は、異なった基準から行わ

れていることを指摘している。つまり、「日本語らしさ」を重視するあまりに、「印象」面がおろそかになる危険がある。「印象」を重視するために、指導の際には、場面を十分に考慮しなければならない。今後の評価研究では、「丁寧さ」や「好感度」以外の場面も調べることで、様々な場面における音声指導が可能になるだろう。

また、「日本語らしさ」や「印象」とはまた違った評価基準も必要だろう。土岐(1992: 37)は、聞き手は「話し手の意図したのとはまったく異なる意味内容として解釈してしまうこと」の例として、(1)「単に一時的な意思疎通の妨げとなるもの」(2)「内容を発話意図とは全く異なって理解されるもの」(3)「発話者の人格や能力の評価にまで影響を与えかねないもの」の3つを挙げている。そして、このうち、特に(2)と(3)が問題であることを指摘している。しかしどのような発話がこれらに当たるのかは明らかにされていない。指導の際には、より深刻な問題を引き起こす誤りを中心に指導していくべきであろうから、今後は、上述の3つの評価にはどのような発話が関わっているのかを具体的に提示していかなければならないと思われる。

3. 評価者の属性による差

日本語教育という場においては、母語話者と非母語話者を分け、母語話者は母語話者でひとくくりにしがちである。しかし、母語話者であれば全く同じ評価をするというものではないだろう。日本語教師がそれぞれの現場で、「母語話者はこうだから…」と決めつけて指導を行うことは、非常に危険である。評価研究において、評価者の属性を明らかにすることは大切なことである。3.1 では日本語教育の専門家ではない日本人と日本語教師の差異を調べた論文を、3.2 では男女差を調べた論文を紹介し、3.3 で「評価者の属性」に関する今後の課題を考える。

3.1 日本語教育の専門家ではない日本人と日本語教師の差異

以下に紹介する研究は発音評価に限ったものではないが、日本語教育の専門家ではない日本人（以下「一般の日本人」とする）と日本語教師の差異を明らかにしている。

河野・松崎(1998)は、非母語話者による二つの発話を評価者に聞かせ、「日本語らしさ」を7段階で評価させるという方法で、日本語日本文学の学

生と日本語教師を比較している。その結果、日本語教師は学生より全体的に低めに評価することを報告している。

同様に、原田(1998)は、初級学習者のロールプレイを、一般の日本人2人に見せて自由に評価をさせた。その結果、学習者に対して、プラスの評価をしたコメントは、マイナスの評価をしたコメントの2倍あったことを報告している。このことから原田(1998: 162)は、「一般の日本人は学習者の悪かった点より良かった点に目を向ける傾向があることが推測される」とまとめている。

一方、小池(1998)は、上述の原田(1998)と同じ初級学習者のロールプレイを、一般の日本人2名に評価させた結果と、日本語教師1名に評価させた結果を比較している。それにより、日本語教師は、到達するべきレベルからの減点法で評価をしているのに対して、一般の日本人は一定の評価軸はなく、個々の学習者のレベルを考慮して評価していることがわかった。また、一般の日本人は、「ミスに注目するのではなく、ミスによって生じた誤解を回避するストラテジーや理解できなかった時にそれを解消するストラテジーがとれたことに注目して、プラス評価をする傾向になる」と言い、一般の日本人は、「正確さより、非言語表現を含めたコミュニケーション能力に注目している」とまとめている。

中川・石島(1998)は、日本語が「上手になった」と判断する場合の、一般の日本人の評価基準と日本語教師の評価基準にどのような違いがあるのかを調べている。評価者は、一般の日本人9名と日本語教師5名である。その結果、一般の日本人は、文法や語彙や表現¹、音声、非言語、会話運用能力、内容など、様々な視点から評価していることがわかった。また、一般の日本人に特徴的であったのは、表情や態度などの情意的非言語面も重要な要素になっていることである。一般の日本人は、非言語も重要であると認識しているのに対し、日本語教師はほとんど注目しなかったようである。

以上の結果は次の二つの知見にまとめられる。

- ① 一般の日本人は日本語教師よりも評価が寛大である(河野・松崎 1998; 原田 1998)。
- ② 一般の日本人は正確さより非言語表現を含めたコミュニケーション能力に注目している(小池 1998; 中川・石島 1998)。

これらの知見は、これまでの日本語教育が、非

母語話者に母語話者に近い日本語を話させることを目的とした、いわゆる「日本人らしい日本語」のみを求めてきたことによって説明することができる。

ただし、ここで注意が必要なのは、以上挙げた論文が、全て初級の学習者を対象としていることである。第4章で取り上げる、「学習者のレベル差が評価に及ぼす影響」を調べた小河原の一連の研究(1993, 2001b, 2001c)では、「日本語レベルが進むに従って日本人評価が厳しくなる」ことが結論づけられている。一般の日本人も、学習者が中級上級になると、その評価を厳しいものとしていくことが考えられる。中級上級の学習者に対する評価に、一般の日本人と日本語教師で差があるのかを見ていくことも必要だろう。また、上述の論文はいずれも評価者が少ないが、さらに多くの人数を対象とした量的な研究も必要だと思われる。

3.2 男女差

次に、評価者が男性であるか女性であるかによって、同一の音声聞いた場合の評価が変わるのか、という問題について考えてみたい。そこで、まずは発話における男女の違いを論じたものをいくつか紹介する。

永原(2000)は、文末イントネーションが上昇調か非上昇調かといった選択や、終助詞の選択にも男女差が現れること、また高低の幅だけでなく、音の「高さ」や「長さ」などにも男女差が現れ、それらを総合的に分析することの必要性を言っている。

鈴木(1999)は、テレビドラマの台詞を資料とし、文末の「よ」「の」「のよ」「んだ(のだ)」を分析した結果、それらのイントネーションに、男性話者か女性話者かで差があったことを示している。

今田編(1998)の一連の研究では、テレビ談話の分析や読み上げ実験等から、終助詞「か」のイントネーション研究を行った。その結果、男性に非上昇イントネーションが多いことを指摘した。さらに、小池(2000, 2002)は、今田編の研究で指摘された文末イントネーションにおける男女差を、量的に検証するべく、10個の談話を読み上げる実験を男女それぞれ10名ずつに行った。その結果、「ていただけませんか」という発話に関して、男女で差があり、男性のほうが非上昇調が多いことが実証された。

以上の研究により、日本語母語話者の文末イントネーションに男女で差があることは明らかである。このように、発話において男女差が確認されたとい

うことは、当然聞き手として評価する際にも、男女で差があるという可能性が考えられる。小池(2000)は、「ていただけませんか」の「か」のイントネーションが、上昇調であるものと非上昇調であるものの発話を評価者に聞かせ、その印象を答えてもらった。その結果、上昇調は女性らしく、非上昇調は男性らしく聞こえること、また評価者が女性であるほうが、イントネーションに敏感であることがわかった。

小池(2000)の実験結果により、評価者が男性であるか女性であるかによって評価は違う可能性が考えられる。小池の実験は依頼文一つに限ったものであり、他に男女で評価が異なることが報告された論文はないので、一般化することはできない。しかしながら、男性であるか女性であるかによって評価が変わるのであれば、今後の評価研究においては、評価者を男女で分けて分析することが必要であろう。

3.3 「評価者の属性」に関する今後の課題

上述のとおり、河野・松崎(1998)、原田(1998)、小池(1998)、中川・石島(1998)では、日本語教育の専門家ではない日本語母語話者と日本語教師では、評価の仕方が異なることを示している。また小池(2000)では評価者が男性であるか女性であるか、また発話者が男性であるか女性であるかによって評価が異なることが報告されている。今後の評価研究においては、日本語教師の専門家でない母語話者の視点を取り入れる、また男女に分けて結果を提示していくことが必要であろう。

しかし、日本語教師であるか否か、男性であるか女性であるかだけでは、属性が十分に検討されているとは言えない。小河原(2001a: 69)は、「評価研究の分析上評価者要因の検討は不可欠である」として、「日本人評価者側の要因としては、社会心理学的要素(外国人に対する心的態度等)、属性(職業等)、出身地、日本語観、外国人との接触度、外国滞在歴、外国語能力、外国語学習観、外国語学習歴、年齢、性別等が挙げられる」と述べている。この中でも特に年齢による評価の違いはこれまでの論文で取り上げられていないが、その差は顕著であろうと筆者は考える。データの収集が容易であるといった理由から、評価者は大学生などの若年層になりがちである。しかし年齢は発話行動に大きな影響を与えていると考えられるため、他者の発話を評価する際にも、評価の観点や容認度に年齢によって差が出て

くると予測される。

また、これまでの研究では、評価者に非母語話者を含むことはほとんどなかった。しかし、2.1 で取り上げた崔(2003)では、韓国語母語話者に評価をさせることにより、彼らが指導を受けなければ、母語と違うアクセントの「高さ」変化には注意が向けられない可能性が示された。このように、非母語話者に評価をさせることは、非母語話者が気づかない発音の特徴を知る上で有意義である。

さらに、第6章で詳しく論じるとおり、筆者は全ての非母語話者が「母語話者らしい発音」を目標としなくても良いと考える。非母語話者に評価をさせることで、非母語話者が感じる「日本人らしさ」や「印象」が明らかになる。そこに非母語話者と母語話者の相違点があれば、非母語話者が発音によって母語話者に悪い「印象」を与えていた場合でも、本人にそのつもりがなかったことが明らかになる。

今後は、それぞれの論文において評価者をより広範囲な母集団(年齢、職業、出身地など)から抽出するとともに、3.1、3.2 で紹介した観点以外の、評価者の属性による違いに焦点をあてた論文も必要だと思われる。

4. 発話者のレベル

ここでは、非母語話者の日本語レベルによって聞き手の評価は変わるのか、また変わるとすればどのように変わるのかを調べた論文を紹介する。学習者のレベルに焦点をあてた論文は、筆者の管見の限り小河原(1993, 2001b, 2001c)しか見当たらない。

小河原(1993)は、非母語話者の発音上の問題から、その発話が多義的に解釈されるような文を複数含んだ文章を非母語話者に読ませた音声テープを作成した。そして東京語話者に聴取実験を実施し、音声を5段階(気になる→気にならない)で評価させ、個別インタビューを行った。それにより、学習者の発音上の問題から、評価者が誤解して音声を聞いていた場合、誤解に気づいた後で、その評価を下げるかどうかについて調査している。その結果、誤解が発覚する前に高い評価を受けていた非母語話者ほど、誤解に気づくと評価が下がり、逆に低い評価を受けていた非母語話者は、誤解に気づいてもそれほど評価が下がらないことがわかった。以上から、「日本語の発音がうまい外国人の発話ほど、誤解によって評価が下がる」と結論づけている。つまり、発音が

上手であるのにも関わらず、誤解を生むような発言をすると、それは厳しく評価されるということが明らかにされた。

小河原(2001b)は、評価者である日本人の評価意識や心的態度の実態を明らかにすることを目的として質問紙による調査を行っている。主な結果として、中上級になると、「まだ下手でもしかたがない」「外国人だからしかたがない」といった「寛容」の度合いが下がることがわかった。つまり、中上級の非母語話者に対して評価が厳しくなると言える。また、ビジネス等の公的場面では、「寛容」「非寛容」に関わらず、なまりのない発音を重視する評価意識が認められている。

以上をまとめると、「日本語レベルが進むに従って日本人による評価が厳しくなる」ということが言えよう。母語話者は、日本語レベルが低い非母語話者に対しては、「外国人だからしかたがない」という考えが働き、誤りやなまりには寛大である。しかし学習者のレベルが高くなるとそうはいかない。評価研究において、対象とされた非母語話者のレベルを考慮していない論文があるが、今後は日本語レベルによって評価が変わることを視野に入れて研究を行うべきであろう。

次に今後の課題として、評価が厳しくなるというのは、どの音声項目（つまりアクセントであるのか、イントネーションであるのか、単音であるのか）に関して、どのくらい厳しくなるのだろうか。上級の非母語話者であっても母語の影響を受けて訛りが残ることが考えられるため、初級のうちから完全な発音を目指すのは難しいと思われる。そうであれば、初級で最低限求められる発音、中級で求められる発音、上級で求められる発音が明らかにされることで、それを踏まえた音声指導を行っていくことが可能になるだろう。

5. どのような場面設定がなされているか

筆者は、コミュニケーションを重視した音声教育に必要であるのは、場面であると感じる。場面が違えば、同じ発話文であっても話し手の感情の入れ方が違う。感情の入れ方によって、その発音は異なるのである。

そこで、これまでの評価研究で取り上げられてきた場面を考えてみたい。井内(1998)は、日本語弁論大会やNHKのテレビ語学講座、石崎(2000)はインタ

ビューを受けている場面、全(2001b)はお礼を言うなどの「丁寧さ」が求められる場面、荻野・洪(1992)も同じく「丁寧さ」が求められる場面、小池(2000, 2002)は依頼場面を取り上げている。それぞれの場面における評価研究は数少なく、今後も同じ場面で、対象者や評価者を替えた研究を行うべきであろう。まだ取り上げられていない場面が非常に多くあると感じる。場面が違えば、話し手の感情は違い、また求められる発音レベルの高さも違う可能性もある。

小河原(2001c)は、第4章で取り上げた小河原(2001b)で、ビジネス等の公的場面での発音を重視する傾向が見られたことを受けて、対象を一般の社会人に広げた。小河原(2001b)で使用した質問紙に、新たに実際の仕事場面で起こる問題について問う自由記述を加えたものを使用している。その結果、「一見寛大に見える態度も、ビジネス等の公的場面や日本国内で長期間生活していく場面では、やはりなまりはない方が良いとする記述が多く見られた」(小河原 2001c : 11)と報告している。また、なまりによる具体的な問題については、「誤解」「聞き手による内容確認等の手間」、「イライラなどの感情面」が挙げられている。この結果からも、ビジネス場面では、ほんの少しの誤解でも多大な影響を与えることが示唆されているが、ビジネス場面を取り上げた評価研究は、筆者の知る限りでは見当たらない。ビジネス場面では実際にどのような問題が起きているのか、さらに詳しく調べていく必要があるだろう。

また、これは筆者の経験であるが、ある研究会で非母語話者の論文発表が行われた際、一つ一つの単音やアクセントがはっきり発音されなかったために、何が言いたいかがわかりにくいことがあった。これが日常の会話であったなら、おおよその言いたいことがわかれば、さほど問題にはならないかもしれない。しかし研究会の論文発表という場では、初対面の話し手と聞き手の間に発表前の共通理解はほとんどないと言ってよい。話し手の研究目的、方法、結果、考察などが全て正確に伝わってこなければ、質問をすることも難しい。また、第1章でも触れたが、Stevick(1978)では発音が上手でないとアカデミックな面でも劣る学生であると見なされることが指摘されている。研究発表の場で発音が悪いと、その研究内容まで低く評価される可能性がある。このような研究発表の場で求められる発音とはどのようなものなのか、詳しく評価していく必要がある。

ほかにも、大学の先生との会話、アルバイト先など、まずは母語話者と非母語話者の接触場面で、発音が原因で実際にどのような問題が起きているかを調査し、それに基づいた評価研究を行っていくことが求められる。

6. 共生言語としての日本語を目指した評価研究

ここで、今後の評価研究に必要であると思われる、「共生言語としての日本語」という概念について検証する。筆者は、例えば日本人と結婚した外国人妻や、両親の都合で日本に来ることになった外国人児童に求められる発音と、外国人ビジネスマンに求められる発音では、その基準が違うと考える。前章で取り上げたように、ビジネスの世界では、些細な誤解がすぐにビジネスに悪影響を及ぼす危険がある。しかし外国人妻や外国人児童の発音を評価させた研究はなく、どのような発音が求められているのかは明らかではない。

岡崎(2000 : 118)によると、「共生言語としての日本語」とは、「母語話者とほぼ同じレベルの日本語をその一部として含むことはあっても、媒体としては、母語場面で使用される日本語とは違うものとして、はっきり区別する」言語である。Berry(1992)は、参加者を受け入れる戦略として、「多文化戦略」「受け入れ側同化戦略」「隔離戦略」「周辺化戦略」の4つがあることを示している。このうち、「多文化戦略」は「参入側を受け入れ社会の一員として積極的に受け入れ、同時に参入側文化も積極的に認め尊重しようとする特徴を持つ。一つの社会に複数の言語や文化の存在を認める立場に立つ」という(岡崎 2000 : 113)。そしてBerry(1997)は、受け入れる側が「多文化戦略」をとるとき、肯定的結果が期待できるという。つまり、そこには民族差別や人種差別などが存在しないことになるので、参入側が自文化を保持しながら生きていくこと、また参入側が使用する言語も認められることになる。参入側が「多文化戦略」をとるためには「共生言語としての日本語」が必要であるわけだ。岡崎・一二三(1994 : 529)は、「どのような状況でも、またどのような目的についても完全な能力を持った話者が要求されるのではなく、母語及び目的に応じた能力レベルを持つ日本語を用いる様々なタイプのバイリンガルが要求される」と指摘する。つまり、全て

の非母語話者に母語話者の日本語に近い日本語を求めていくだけではなく、その場面に応じて、非母語話者の使用する日本語も認めていく「共生言語としての日本語」が必要になってくるのである。

岡崎(2000)では、これまでの第二言語教育が、非母語話者の日本語を母語話者の日本語に近いものとするを目的として行われてきたことが指摘されている。評価研究においても、これまでは、発話者がどのようなレベルの日本語を発音としているのか、またどのような場面であるのかといったことはあまり重視されないまま、日本語母語話者が非母語話者の発話を評価するという形で行ってきた。つまりその目的は、いかなる非母語話者にも、日本語母語話者に近い日本語、または日本語母語話者に高く評価される日本語を求めていくことだけに重点が置かれていたと思われる。しかし、日本には、必ずしも完全な日本語を話すことを目標としない非母語話者がいるはずである。必ずしも日本語母語話者に近い日本語を求める必要のない非母語話者には、どのような音声教育が必要であるのか、それを探るための評価研究も行っていくべきであると思う。

具体的には、例えば外国人児童と日本人児童の接触場面で発音が原因で起こる問題を調べ、その場面における評価研究を行う。すると、外国人児童のどのような発音を日本人児童がどのように捉え、誤解や問題が起こっているのかが明らかになるだろう。そこで外国人児童のみに発音矯正を促すのではなく、日本人児童にも外国人児童の発音を許容していく姿勢を促すのである。また、先述のとおり、これまでの評価研究には非母語話者を評価者とすることはほとんどなかった。しかし、評価者に非母語話者を含むことで、非母語話者が感じる「日本人らしさ」や「印象」が明らかになる。母語話者と非母語話者の評価の共通点と相違点を知るとは、非母語話者が発音学習をしていく際にも、また受け入れ側である母語話者が参入側である非母語話者の発音を理解し認めていくためにも重要であると思う。参入側と受け入れ側の発音評価が違うことに双方が気づけば、これまで起こった発音による問題が誤解であったことに気づき、お互いを認め合い、歩み寄る姿勢が見られることにつながる。

7. まとめ

以上、これまでに行われてきた評価研究を概観し、

今後の課題を述べてきた。ここで、これまで見てきた評価研究のまとめを行いたい。

まず、第2章で取り上げた論文では、「日本語らしさ」においても、「丁寧さ」などの「印象」においても、アクセントやイントネーションの「高さ」が重要であることがわかった。この結果は音声研究においては既に明らかにされてきたことであるが、実際の教育現場にはきちんと活かされているであろうか。今後より教育現場に活かされていくためには、どの場面のどのような発話の、どの部分にどの程度の音の「高さ」がより評価に影響を与えるのかを調べ、具体的に提示していくことが必要であると思われる。また、音の「高さ」が重要であると言っても、その他の語気の「強さ」や間の取り方、音の「長さ」との無関係ではない。それらも含めた、より詳しい研究が必要だろう。また、「丁寧さ」や「好感度」のみならず、その他の印象も調べていくべきである。

次に第3章で取り上げた論文では、一般の日本人と日本語教師の評価の差異や、男女の評価の差異が明らかになった。属性によって評価に差があるということは、逆に言えば、今後の評価研究においては評価者の属性を十分検討していかなければ、その結果がある属性の評価者に偏ったものになり得る可能性を示している。ある属性にしか該当しない結果を、一般的な評価であるとして音声教育を行うことは危険である。評価者の属性に関しては十分注意が必要であると思われる。さらに、今後は、比較的评价者に含まれない年代や非母語話者も評価者に含めていくことが必要であろう。

第4章で概観した論文では、非母語話者の日本語のレベルが上がるに従って、日本人の評価は厳しくなることが示唆された。第3章で取り上げた論文では、一般の日本人は、日本語教師よりも肯定的な評価をすることが示唆されているが、上級の学習者の発音に対しては、厳しい評価をすることが考えられる。カリキュラムの都合上、音声教育をさほど取り入れない日本語学校も多いと思われるが、上級学習者の感情や意図等が正確に伝わるためにも、音声教育は必須である。また、今後の評価研究においては、初級で最低限求められる発音と、上級で求められる発音を具体的に明らかにしていくことで、レベル別の音声教育のシラバスを設定することができると思われる。

第5章では、本稿で取り上げた研究ではどのような場面が取り上げられているかをみた。それぞれの場面における評価研究は数少なく、一般化できるものではない。また、まだ取り上げられていない場面も数多くあるため、音声教育に具体的に提示できる段階ではない。コミュニケーションを重視した音声教育を行うためには、場면을重視した音声教育が必要である。場面が違えば求められる発音のレベルも違う。また場面がなければ、感情も込めようがない。今後も場面を重視した評価研究を多々行っていくことが望まれる。

第6章では、「共生言語」について考察した。完全な日本語を必要としない非母語話者のためにも、「共生言語」を目指した新しい評価研究も行っていくべきだろう。時間はかかるであろうが、母語話者が非母語話者の発音を少しずつ理解していくことにつながることを期待される。

今後も、それぞれの非母語話者が必要とするレベルの音声教育を行うために、さらに知見を積み重ねていくことが望まれる。

注

1. ここでの「表現」とは、「依頼の表現ができる」などの言語面を指す。

参考文献

- 井内麻矢子 (1998) 「日本語母語話者による日本語学習者の音声的特徴の評価」『人間文化研究年報』21 お茶の水女子大学人間文化研究科 45-49.
- 石崎晶子 (2000) 「学習者の言語行動に対する母語話者の評価—主観的評価と客観的評価の関係—」『第二言語としての日本語の習得研究』3, 19-33.
- 今田滋子編 (1998) 『地域の日本語教育活性化のための談話音声の研究』平成8・10年度 文部省科学研究費補助金基盤研究B (2) 研究成果報告書
- 岡崎敏雄・一二三朋子 (1994) 「多言語・多文化共生のパーパスティブに立つ日本語教育」『教育学研究紀要』40, 527-532.
- 岡崎眸 (2000) 「多言語・多文化共生社会を切り開く日本語教育」『多言語・多文化社会を切り開く日本語教師養成—日本語教育実習を振り返る—』お茶の水女子大学教育実習報告書編集委員会 111-138.
- 小河原義明 (1993) 「外国人の日本語の発音に対する日本人の評価」『東北大学文学部日本語学科論集』3, 1-12.
- 小河原義明 (2001a) 「日本語非母語話者の話す日本語に対する日本人の評価意識—日本語教育における言語意識—」『日本語学』20-7, 64-73.
- 小河原義明 (2001b) 「日本語非母語話者の話す日本語の

- 発音に対する日本人の評価意識—日本人大学生の場合—『日本語教育方法研究会誌』8-1, 28-29.
- 小河原義明 (2001c) 「日本語非母語話者の話す日本語の発音に対する日本人の評価意識—社会人の場合—」『日本語教育方法研究会誌』8-2, 10-11.
- 荻野綱男・洪珉杓 (1992) 「日本語音声の丁寧さに関する研究」『日本語イントネーションの実態と分析』平成3年度研究成果報告書 215-258.
- 河野俊之・松崎寛 (1998) 「一般日本人と日本語教師の音声評価の差異」『日本語教育方法研究会誌』5-2, 24-25.
- 小池圭美 (2000) 『依頼文における終助詞「か」のイントネーション』お茶の水女子大学大学院修士論文 (未公開)
- 小池圭美 (2002) 「依頼文における終助詞『か』のイントネーション」『言語文化と日本語教育』24 お茶の水女子大学日本言語文化学会 13-27.
- 小池真理 (1998) 「学習者の会話能力に対する評価に見られる日本語教師と一般日本人のずれ—初級学習者の到達度試験のロールプレイに対する評価—」『北海道大学留学生センター紀要』2, 138-156.
- 小林ミナ (2000) 「『何を』教えるかの再吟味—日本人評価研究の意義と限界—」北海道大学留学生センター紀要 4, 149-159.
- 佐藤友則 (1995) 「単音と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の比較」『世界の日本語教育』5, 139-154.
- 鈴木千寿 (1999) 「文末表現のイントネーションと男女差」『ことば』20号 現代日本語研究会 75-82.
- 全賢善 (2001a) 「待遇行動にみられる韻律の特徴について—平均ピッチの相違を中心に—」『言語と文化』2 名古屋大学国際言語文化研究科日本語文化専攻 241-255.
- 全賢善 (2001b) 「韓国語母語話者にみられる日本語の韻律的特徴—丁寧さのイントネーションの平均ピッチを中心として—」『平成13年度日本語教育学会春季大会予稿集』133-139
- 崔壯源 (2003) 「日本語らしさの許容度の実態調査—アクセント核の移動が影響する日本語らしさ—」『韓国語母語話者の日本語音声 研究論文集』東京外国語大学 鮎沢研究室 39-55.
- 東間由美 (1991) 「外国人の日本語発話の日本人話者による評価」荻野綱男編『日本語の音声の構造 2』筑波大学 113-118.
- 土岐哲 (1992) 「日本語音声教育の再検討と一思案—外国人に対する日本語教育を中心に—」『D1 班研究発表論集』平成4年度研究成果報告書 36-39.
- 中川道子・石島満沙子 (1998) 「会話の上達度を計る評価基準」『北海道大学留学生センター紀要』2, 169-185.
- 永原浩行 (2000) 「性差とイントネーションのパラメトリックス」『ことば』21 現代日本語研究会 37-44.
- 日本語教育学会(1991) (編) 『日本語教育機関におけるコース・デザイン』凡人社
- 原田明子 (1998) 「一般の日本人は外国人の日本語をどのように評価するか」『北海道大学留学生センター紀要』2, 157-168.
- 水谷修・鮎沢孝子・前川喜久雄編 (1992) 『日本語の韻律に見られる母語の干渉(1)—音響音声学の対照研究—』文部省科学研究費重点領域研究『日本語音声』D1 班
- 水谷修・鮎沢孝子・前川喜久雄編 (1992) 『日本語の韻律に見られる母語の干渉(2)—音響音声学の対照研究—』文部省科学研究費重点領域研究『日本語音声』D1 班
- 水谷修・鮎沢孝子・前川喜久雄編 (1992) 『日本語の韻律に見られる母語の干渉(3)—音響音声学の対照研究—』文部省科学研究費重点領域研究『日本語音声』D1 班
- 関光準 (1989) 「韓国語話者の日本語音声における韻律的特徴とその日本語話者による評価」『日本語教育』68, 175-190.
- 渡部倫子 (2001) 「日本語母語話者は学習者の流暢さをどのように認識しているか」『平成13年度日本語教育学会春季大会予稿集』139-144.
- Anderson-Hsieh, J. (1989) Approaches toward teaching pronunciation: A brief history, *Cross-Currents*, 16, 73-78.
- Berry, J. W. (1992) Acculturation and adaptation in a new society, *International Migration*, 40, 69-85.
- Berry, J. W. (1997) Immigration, acculturation, and adaptation, *Applied Psychology: An International Review*, 46(1), 5-68.
- Morley, J. (1988) How many language do you speak? Perspectives on pronunciation-speech-communication in EFL/ESL, *Nagoya Gakuin University Round Table on Linguistics and Literature Journal*, 19, 1-33.
- Stevick, E. (1978) Toward a practical philosophy of pronunciation: Another view, *TESOL Quarterly*, 12(2), 145-150.

こいけ たまみ／お茶の水女子大学大学院 応用日本語論講座

gzx02533@nifty.ne.jp

Surveying evaluation research of pronunciation and an overview for the future

KOIKE Tamami

Abstract

This paper attempts to apply the results obtained from evaluative research to the teaching of pronunciation. This is considered in a communication and social framework for the education of pronunciation.

The question of evaluation research is approached from four points of view represented in the literature: 1) standards of evaluation, 2) Differences between evaluators, 3) learner level, and 4) situation.

After this consideration, this paper concludes that there is a need provide pronunciation training which meets the individual needs of learners, placing important consideration on the situation. Evaluation research also needs to be focused in this direction.

【Keywords】 pronunciation education, evaluation research, situation, symbiosis language

(Department of Applied Japanese Linguistics, Graduate School, Ochanomizu University)